参考資料２

# 第２回検討会 議事要旨

水害リスクを自分事化し、流域治水に取り組む主体を増やす

# 流域治水の自分事化検討会（第２回）　議事要旨

日時：令和 5 年 5 月 25 日（木）13:00-15:00
場所：合同庁舎 3 号館 1 階水管理・国土保全局会議室 web 会議併用

※骨子案に関するご議論

## １．施策を進めていく上での着眼点と具体策等に対するご意見

### （１）認知の拡大と伝え方の工夫

**（知識、信念、規範など心の状態の表現について）**

・資料について、言葉の使い方で少し気になるところがあり、少し質問、コメント、両方ともとれるようなことを３点話したい。１点目、課題のところに「認知」とあるが、これに含まれるものとして、知識であるとか、信念、規範であるとか、いくつかの心の中の状態というか、そういうものを表す言葉があると思うが、そういうものを認知という言葉だけできちんと表現できているのかどうか、少し不安になっている。知識もそうだし、信念でも規範でも、働きかける心の中のものがもっとあると思う。

**（地域の恵みとリスクを伝える）**

・発表を聞きながらメモをとって自分なりに整理していたが、この表（資料２#５）と同じように３段階にまとめていた。この表にある、認知、自分事化、行動ではなく別の３つにまとめていたが、結局一緒であることに気が付いた。事例紹介を整理すると、ポイントの１つ目は、地域には、恵みとリスクがあることの現状と、その歴史を伝えるという話が、多くの方に共通していた気がする。伝えるということの、伝える対象が様々で、子供であれば防災教育になるし、こんなに地域には恵みがあるのだよと、恵みの方を伝えることもあるし、伝承碑のようなものもあり、様々な対象に対して様々な手法がある。伝承碑から今後のデジタルの媒体など、手法も違うし、相手も子供達からあまり興味のない人、あるいは専門家などいろいろな人がいて、どう伝えるかが共通していたように思う。指標化、レジリエンスの数値化も一つの伝え方だと思う。

### （２）自分事化の機会創出と手段

**（教育課程に防災への備えを）**

・文部科学省も、SDGs については、知ってもらうことをかなりされている。SDGs と流域治水はすごく関係が深いと思う。国民自身が生きていくために、いろいろな水害や地震などいろいろなことに対応していくために、教育課程に防災への備えをプログラムの中に入れることが大事だと感じている。倉敷市は、生涯学習ということで、公民館講座などで、年長の皆さんが昔経験した水害のことを話していただくことを含め、防災教育を行っている。

（域外から来た人がどうすればいいか）

・また、高校生や大学生、観光客など違う地域から来る人たちが、水害や地震が起きたらどうすればいいのかを考えるなど、そういう観点も必要ではないかと思っている。

（人と人をつなぐ仕掛けを）

・２つ目のポイントは、「人と人とをつなぐ」ということだと思う。その中の一つに、私は、キーパーソンの話をしたが、とりまとめたり、ひっぱっていく人たちも大事だし、上下流をつなぐことも大事だし、官民、民民をつなぐ、人と人とをつなぐいろいろな仕掛けというのも必要だなと、たくさんの事例で学んだ。

（流域治水・まちづくり・農業と生態系保全がバランスした絵を描く）

・３つ目のポイントは、流域治水とまちづくり、または農業と生態系の保全の３つがバランスしたものの、まずは絵を描くことが大事なのかなと思う。河川法には、利水、治水、環境があるが、それと似ていて、狭義の流域治水（洪水から守る話）、地域の資源を利用する中にまちづくりと農業があると思うが、それと環境の生態系、これのまずは絵を描くことがあり、できるところなら場を作っていく、これが３つだと思う。この３つが認知、自分事化と対応するなと思って聞いていたので、その辺がリンクしてくるといい事例かと思う。

（現地の課題を把握し分析する仕組みを）

・もう一つは自分事化で、これは行動につながるワンステップ前のことで、態度を作ることだと思うが、ここはたぶん事例によって全然違って、現場でどういうところに課題があるかを学ぶ仕組みが、もしかすると国レベルでは大事なのではないかと思う。例えば、地方の事務所などで流域治水を進めようとしたときに、ここに問題があるのだということを現場の人はよくわかっている、そこにヒントがあるのではないかと、そういうものを吸い上げて分析する仕組みがあった方がよいのではないか。これは全国で千差万別だと思うので、そういうところを見られるような仕組みが必要なのではないかということが２点目。

（３）ターゲットの把握と絞り込み

（取組の優先度と役割分担の検討）

・施策を進めていく上での着眼点と具体策とあるが、割と早めにできるものと、いろいろと、優劣というわけではないが、アクションとしてどれを優先していくか、主体が誰になるかなど、これは省庁、これは NPO に依頼する、まちが中心になっていくとか、さらに、重要性というと語弊があるが、取組について全部並行していやっていくことは難しいと思うので、そのあたりをどう考えるかだと思う。素晴らしい事例紹介があり、国土交通省でも施策のとりまとめをしているが、これを今すぐできるかというと、どのように分けていったらよいのか、まずは国土交通省としてできること、NPO に活動をお願いすること、自治体にふって進めていただくこと、大学、有識者の先生方にお願いすることなどがあると思うが、幅広で有意義なご意見がたくさんあり、うまくまとめられているので、それだけに難しいというのが率直な感想である。

・取組の優先度と役割分担を考えるのは大変重要なご指摘。一方で、仏教の中には、菩薩は地面からいろいろ湧き出てくると言う。地涌の菩薩というのか、そういうことも多分あるのではないかと思う。今日の事例は、まさにいろいろなところから出てきている感じだが、組織と組織、国全体として、地域としてどう進めていくか、ある種の戦略を考えていくことは非常に重要だと私も思う。この両方をうまく組み合わせていくのかなという気がする。

（子供自身が考え家族を巻き込む）

・特に地方都市では、家族のつながりがもともと強い。学校で学んだことを家に持ち帰って、家族と一緒に勉強というか調べてきて、発表してみんなで作ろうとなると、家族で一緒になって取り組むし、それが一つのきっかけとなって家族全員の防災意識の向上になる。防災教育、学校で教えることについて、資料記載を可能であれば少し変えてもらいたいが、防災教育の推進ということは、記憶を伝えるだけではなく、子供に教えるだけでもなく、小学生も中学生も、本当は高校生も大学生もみんなそうだと思うが、将来の地域を支える子供自身が中核になって考えていくことが大事だと考えている。

・家庭でというのはすごく効く。20 年くらい前だが、名古屋と船橋の中学生を水俣に連れて行って環境学習をして、その中で中学生の環境問題の意識がどう高まるか、行動できるかを勉強したことがあるが、男の子は現場にいくとバっと燃え上がる。変化値が行く前とものすごく変わる。女の子はそうでもない。ところが、終わった後一か月後に調べると、女の子はずっと続くのに、男の子は冷めてしまう。調べてみると、女の子は家で話をしている。水俣でこんな結果が出た。家で話すことによって自分事化になっていく。男の子は家であまり話をせず、ジェンダー差が明確に出ている。家で取り組むことは、大変重要なことと私も思う。

（避難弱者を対象とした施策を）

・最後に、流域対策の中で、避難ということも重要だと思うが、おそらく、地域文化を創るといった話と、最後に本当に取り残される避難弱者がリンクしていないと思うので、避難弱者の問題については別途切り出して検討していくことが重要かと思う。

（４）主体的な取組が進むための環境整備

（戦略的に社会の雰囲気を変えていく）

・かつて環境問題がそうだったが、社会のモード、雰囲気が変わる、変えなきゃいけない、タバコもそうだが、社会のモードを切り替えていくことを強く意識する必要があるのかと思う。資料の中に「ターゲット」という言葉があるが、全ての層をカバーしなくても、相転移は起きそうな気がする。ある一定のメジャーな部分が変われば、残りもたぶん変わっていくと思うので、そういう意味では、戦略的に社会の雰囲気を変えていく、それが重要であるという気がした。

・「感じる」ようなものであったり、「細分化してみて考えた方がよいのではないか」ということに関連するが、タバコの話ではないが、公衆衛生学的な要素は必要なのだろうと思う。行動経済学のような話だが、実は、コロナの時に、私は知らなかったが、医療系の先生と数学系の先生が

検討会議におられて、行動経済学の先生もおられて、実はいろいろなメッセージで私たちはコントロールされていたことをこの間初めて知った。仕向けるためには、そういった視点も必要だと聞いてて思った。

（心で感じて心で動く）

・それから、今日の話を聞いていて感じるのは、人は心で感じて心で動くことがある。そこが結構重要かと思う。資料の中で気になったが、「（２）流域治水のメカニズムと効果の可視化」というところで、「メカニズムが理解できないと自分事化しない」とある。それは私もそうで、理科系の人によく見られがちだと思うが、自分が理解できないと動けないということだが、必ずしもそうではない人が世の中にはたくさんいて、分からなくても必要だと思えば動くのだと思う。そういう意味では、心で感じて心で動くことが非常に重要かと思う。

・コンソーシアムの取組の中の、「協調領域」と「競争領域」とに分けて進められないかという話と、戦略的に社会の雰囲気を変えていくことができないかという発言が結びついた。メニュー、ツールはいろいろなものができていくし、必要な人の手に届く位置にきているのではないかと思うが、やはり、より多くの方が自分事化をしていくためには、少し心理的なところになるのかもしれない。企業で言うと TCFD の取組がそうかもしれないが、中小企業から個人まで、社会の雰囲気を変えていくには、どういう手段でそれをしたらよいのか、非常に悩ましいと感じた。

（個人を把握できる規模の取組）

・人が成長するプロセスに関与する講座を作る上で、特に 2001 年、2002 年生まれの皆さんが参加してくれる講座だが、大人数の講座を作らないようにしているのが一番大きい秘訣。40 人以上になると、私や地域の迎え入れる側などが苗字などを覚えられなくなってしまうので、物足りなさをたぶん感じてしまう。自分事化、認知みたいなところで、行政側なのか、この仕組みを創っていく側なのかが、個人を認めてくれているということ、安全な方向にいざなってくれている、流域治水を通して自分のことを見てくれているというような感覚が備わっていった方が、確かに自分もそこに関わっていった方が安全だなと、そういったことになるのかと思う。

（必要以上に情報を渡さず自分で自分事化）

・講座の参加者は、地域を選んで来ているわけでもなかったりするので、そういった意味では、流域に興味がないとか、自分が住んでいる場所に興味があまりないといったことと、地域に出会って地域に関係することが楽しい人は、すごく近いのではないかと思う。山形県小国町に初めて来たみんなが殆どで、小国町に来て、小国町はこんなにいい場所なんだと感じて、そこから自分で関わっていくようなプロセスをとるので、必要以上に説明しないことも大事にしている。事前情報を渡さないで地域に関わってもらった方が、復習でそれを自分のものとして構築できるので、もしかしたら必要以上に情報を渡さないことも大事なのかなと、少人数の講座で経験したことだがそういうふうに思う。

・心で感じて心で動く、あまり情報が多すぎるというのも確かにあるのかもしれない。ただ、一般的にはまだ少ないという中で、それを増やす努力も必要だと思うが、お二人の委員からお話があったのは、人が動いていくときの核心的なところに踏み込んでいただいたように思う。

**（５）持続的に流域治水を推進**

**（暮らし・生活者を含めた農村コミュニティ機能の維持）**

・表現のことになるが、資料に今後の骨子の検討があり（資料２#５）、「農業組織に対する啓発、機能維持」が項目として挙げられていてありがたく思う。そこでは、土地改良区や水利組合のような、農業組織に対応する啓発や機能の維持はもちろん大事だが、やはり、農家はそこの生活者でもあるので、組織だけの機能ではなく、農村コミュニティとしての機能、集落機能を維持することが特に大事になるのではないかという気がする。農業だけでなく、暮らし、生活者を含めた機能の維持が大事ではないかという感想を持った。

**（他者への思いやりと上下流の関係構築）**

・流域治水でもう一つ考えなくてはならないのは、水をいかに全体で飲めるかが大事ではないか。「自分だけではない」という言葉に触発されたが、いかに他人を思いやるかがすごく大きな要素だと考えるようになっている。上流の人が我慢すればその分下流にいかないし、上流の人がバーっとやってしまったら、下流の人にボーっといってしまう。大崎市の事例でも、昔は水害が起こると、下流の方から「ありがとう、下流への被害が最小限におさえられて」と、下から船がきておにぎりを分けてくれるという。上流と下流の関係ができている。そういった、水を全体で飲むために、痛み分け、他人を思いやるみたいなことを、この絵にどう入れたらよいか？　アイディアが思い浮かばないが、そういった思想も大事なのではないかと思う。

**（自然な感じで前に進み地域文化が創られる）**

・この検討会の最終的な目標は、流域対策をみんなで進める、その雰囲気をいかに盛り上げていくのかという認識でいる。そうすると、流域を単位とした地域文化を創っていくことだと、それが最終的な形で、その中にあるそれぞれの地域、人が適正な行動、取組をしていく、これが目標像だと思う。これをするためにどうしたら良いか？　いろいろなチャネルで取組が必要だが、それはいずれも自然な感じで前に進んでいくような、「自然な感じ」というのが一つのキーワードかなと。肩ひじ張って、気合いれてやるぞという話ではなく、いろいろなセクターが自然な感じで、文化をみんなで創っていくというのが一つあるかと思う。

**（社会全体を良くすることで賛同者と支援者を）**

・D-ism プロジェクト（第１期の成果はレジリアル）を３年前に立ち上げたとき、実はマネタイズすることが目的ではなかった。あのような災害を経験し、こんなことをして、もっと日本の不動産のレジリエンスを高め人々を守っていきたい、そして客観的で公平な評価を行い不動産が維持できるようにしていきたいのだと、そういう話をしたときに、６社から賛同をいただいて一緒にプロジェクトを進めてきた。個社の利益のためにとか、我々の利益のために集まって仕事をしようというわけではなく、もしそのような思想であれば賛同しなかったと言われ、正直驚いた。

新しいビジネスをやろうとか、立ち上げようではなく、今回起きた災害を通して、これも自分事だが、もっと社会に何かできるはずだし、そういった経験を提供していけるようにしたいと、そういったところで賛同いただいた。今回、レジリアルをローンチして、盛大に反響をいただいたが、お金を儲けることではきっと人は動かず、もっと根底に、心を揺さぶられることがあるのではないか、そういうことを実は感じていた。この取組を当社が発起人となって進めるときに、よく当社は、私を好きにやらせてくれたなと思っている。この認証制度の認証機関は当社ではなく、当社は不動産の資産運用業で証券化ビジネスを業としており、兼業ができない。この世界には兼業規制があり、プロジェクトを立ち上げても、当社で認証して収益化することはできないし、立ち上げた当社が申請者になり得る立場なので、利益相反がある。それもわかっているのに、よくやらせてもらえたなというのが正直な話。その時会社の経営者は、企業にとってのマネタイズではなく、もっと違う価値を生み出すことに期待しているのだなと。それは、もしかしたら社会的な価値提供であるのか、それともステークホルダーに対する価値提供であるのかはわからない。実はもっと、本当の奥深いところにあると思っている。差別化して自分が勝つという話ではなく、社会全体を盛り上げて、その社会の一員としてきちんとフィーをもらっていくとか。福祉や貢献とも違うが、社会に対して何ができるかがすごく大事なのではないかと、このプロジェクトを通してすごく学んだ。個人的には、お金を儲けるためというのは少し違って、もっと広い意味で物事を捉えて対応する方が、実は大きな賛同者と支援者が出るのではないかと感じている。

・サステナビリティや ESG を自分事として考えたときに、この頃少し理解できるようになってきたことだが、差別化という言葉を使ったときに、人と差別をして、自分が勝ち抜けて、それで本当に良いのか？　勝ち抜けたその先に何があるのだろうと考えたときに、例えば人よりもたくさん不動産を買って、他の競合よりも高く売った、差別化できたことで会社は評価される。しかし、勝った先はどうなのかと考えたときに、社会全体がよくなるわけではないのではないか、持続可能ではないのではないかと。これも例えだが、ガンマンである自分だけが勝ち進んだ荒野の大地で、自分だけが勝ち残っても、狙う獲物も何もなくなって、きっと自分はすたれていくんだろうと。そうではなく、もっと荒野を耕して、動物や植物を増やして、その実（益）をみんなでいただき、その中で、自分が差別化したことによってみんながついてきて、社会全体がさらに向上するのだったら私はウェルカムだと思っている。差別化という言葉を聞くと、その先に何を考えて何を目指しているのかと、少し考えるようになった。

**（経済原則を捉えた施策も）**

・大変素晴らしい、胸を打つ、先ほど加藤委員、指出委員から話があったことと共通していると思う。「儲かる」を資料に入れるように言ったのは私で、国土交通省は国なので、「儲かる？」という反応もあったが、地方自治体では、人口減少でいろいろな機能が失われていくときに、農家の後継者がいなくなった比較的安い土地を、不動産会社が宅地化することがある。その時、水害の危険度が高いところは規制がかかるが、特例措置もあり、そういうところを見ると、今でも、3m 以上の浸水深のところで宅地化が増えている。今年の２月に論文が出たが、非常に丁寧な解析が行われていて、そういう結果が出ている。そういうことが動いている中でどうしなくてはいけないか？　やはり、そのまちが栄えないといけない。そのメカニズムは何だろうか？　という

ことが一方ではあるのではないかと思う。下道委員からお話いただいたことは非常に重要で、おそらくそれが本質で、「儲かる」はプラスアルファなのだと思うが、両方ないとなかなか国全体、地域全体まで対策が進まないこともあるかと思っている。大変素晴らしい話を伺った。

## ２．骨子作成上のご意見、まとめ

**（取組方針と具体施策の対応）**

・３点目は図の作り方で、２の課題と３はよく見ると薄いグリーンの線で結ばれていて、２と３は結ばれているが、３と４の関係が見えにくくなっている。ここは１対１対応ではなく、入れ子になっていると思うが、この施策はこの取組方針と関係するというようになると、もう少し分かり易くなるかと思う。

・心理プロセスはその通りだと思う。態度がどう形成されていくか、私どもは見る必要がある。興味が涌く、動機が生まれるなどいろいろなプロセスがあるので、どういうことによってそういうことが生まれていくのか、行動することによってそういうものがまた喚起されるものがあることもある。

**（心を揺さぶる取組を）**

・どう表現したら良いか難しいが、高いレベルの議論になっている。こういう議論も踏まえて具体の施策も考えていく。今日の議論も骨子の中に盛り込んでもらって、施策としてどういうものになるのか、次の委員会で議論したい。皆さんの話が全部だったので、私が特にまとめることもないと思うが、やはり、キーワードとして、「心を揺さぶる」ことが全体に流れていたと思う。それを中心に据えながら、具体の施策を進めることを考えていければと思う。

以上

個別意見聴取　河野委員ご意見（要旨）

日時：令和 5 年 5 月 30 日（火）11:00-12:00

場所：web 会議

## １．施策を進めていく上での着眼点と具体策等に対するご意見

（２）自分事化の機会創出と手段

**（政府からの発信の重要性とメディアの活用）**

・キーパーソン、専門家、インフルエンサーは大事だが、そもそも国として、政府として発信することが一番大事な気がする。それぞれの専門家や地域のリーダーが活躍するタイミングは、必要性の理解がある程度一般に浸透しつつある段階において、個人や地域のプレイヤーが各流域に照らしてアクションを考える段階の話。まず初動においては、国土のことをきちんと考えている国のトップや施策トップの人が話すことで、政府が本気であるというメッセージを伝える方がいいと思っている。それがなく、現場の人だけでというのは正直弱い印象を受ける。

・キーパーソンやリーダーの話は工夫の部分で、２段階目の話。１段階目の話としては、国自身による積極的な発信や、メディアを巻き込んだ展開で特番を作ってもらうなど、そういう発信がまずあるべきかと思う。そのベースがあるからこそ、インフルエンサーであったり、地域の人が発信するときに、あれはテレビで取り上げていたことだ、大変そうだから話を聞こうと、人々が情報を取得する心の準備に入れる。流域治水に関するベースとなる知識や興味関心がまだない状態の多くの方々にどれだけ情報に触れさせ、意識の上に上らせることができるかが課題で、電車の中吊り広告のように、見るつもりがなかったとしても、情報が頻繁に入ってくるようなファーストコンタクトさせる戦略があってこそ、２段階目の施策が活きる。

・NHK には支局があり、防災に関しては重要視しているため取材力もある。真備町でも大崎市でも番組を作るための積極的な取材を行っているので、情報の材料を多く有しているはず。そういう材料を使いながら、国や各先進地域が流域治水のことを本気で頑張っていることを伝えるドキュメンタリーの作成を依頼したり、専門誌での記事化を進めたりなどの施策があると思う。

（４）主体的な取組が進むための環境整備

**（心で感じて心で動く）**

・ロジック、必要性と正当性で人は動かず、興味、関心、不安などの情動がないと行動しない。情動は、「面白いことをしたい」「自分にとってメリットがあることならしたい」というポジティブなものもあるが、コロナ禍のマスクのように、「やらないとまずい」などの同調圧力や恐怖・不安も強く作用し、後者の方が効くことも大きい。知っていないと・やらないとかっこ悪い、やらないと後ろ指をさされる気がする、という状況になると人は大きく動く。

（５）持続的に流域治水を推進

**（全国的に自分事化が進む仕組みづくり）**

・認知という言葉にどこまで含まれているのかという鋭いご指摘の通り、知識があることが大前提だが、必要性の認知と自分事化の間に、国としてどんな仕組みを作ることができるのかが大事。

・国と、個人・企業との間に入る都道府県や基礎自治体にまずは自分事化してもらわなくてはならない。特に、水害対策に取り組まなくても直接ディメリットはないが、取り組めば下流側にメリットのある上流側の自治体をどう巻き込むかが一番の問題だと思う。おそらく、現在想定している発信内容だけでは、知ってもらっても自分事化されない。

・今後に続く議論の中で、「国として、市町村に対して何ができるか別途考えていく」と今回明言できるかどうかが、このタイミングで市町村の興味関心を引く上で重要なポイントだと思う。考え方、基本となる法令、市町村を国がどう支援するかが相当上段のところになくてはいけない。それが認知と自分事化の間の一番大きな壁だと思っている。

・自治体内に所在する企業や住民に対する優遇施策、補助金を出せるのは県や市町村で、アクションのスイッチがそこにある。これまでは、自治体の中で物事を進めるために補助金を出すことがベースだったと思うが、自分の自治体だけではない、他の自治体にとってのメリットになるかもしれないことを行ってほしいと働きかけることは、これまでにない施策のはず。国土交通省がこれに手をつけることは、メディア的なインパクトもあり、大きな話題性もあるはず。仕組みの作り方によっては、大きなチャンスになると思う。

## ２．<u>骨子作成上のご意見、まとめ</u>

**（取組方針と具体施策の対応）**

・３．取組方針の「②他者」が誰か、「③理解し行動してもらう」のは誰かなど、主体が明確になるとよい。また、「⑤基準化」についても、意味合いが分かるようにする必要がある。「ターゲット」、「トップランナー」という言葉についても、どのような人なのか誤解のないようにする必要がある（表現としてフィットしていないのではないか）。

・「幅を広げ、質を高める」についても、どこで幅を広げ、どこで収束させていくのか、図で表現できるとわかりやすくなる。例えば、トップランナーを育成した先に何が広がるのか、現状では具体的なイメージがわかない。むしろ、「②他者を巻き込む」、「④トップランナーの育成」は似ていて、それから「③理解し行動してもらう」に移行していき、③には濃淡ができて、濃いものは⑤基準化を、薄いものには補助していく形で別れていくのではないか。

・「③理解し行動してもらう」についても、個人、企業・団体と対象があり、多くの行動がある。実際の水害対策という意味での行動もあれば、トップランナーの仲間になって普及啓発に参加し、認知を広げて地域の常識としていくための取組に参加する住民もいる。

・各プレイヤーや住民においては、流域治水のメカニズムがわかった上で、自分の自治体や周りで何か起きているのか、誰が何をしているのかを知る段階があり、その中で、自分ができることと、自分に還ってくるメリットが何かを知り、そこに補助金が得られたり光熱費が安くなるといったメリットがあることでポジティブに自分事化することもあれば、周囲の状況が進展してきて、恥ずかしいから、やらないとディメリットがあるからやらなくてはという意味で自分事化されてくる段階もある。

・総じて、「３．取組方針」は、内容や主体別に分けたり、行を複数にするなど工夫が必要。「２．課題」の「認知」から「行動」のレイヤーと、「３．取組方針」の５段階（①～⑤）は、個別の４．（１）～（５）よりも肝になると思う。これだけで１枚にできるくらいに作りこめると良い。

以上